

エコーを用いた下肢静脈瘤の血管内焼灼術について

小川 智弘

抄 録

一次性下肢静脈瘤に対する治療の中心は伏在静脈逆流遮断であり、従来は外科的結紮、ストリッピングであったが、血管内焼灼術が臨床応用されるようになると、外科的治療より低侵襲に施行できることから、現在では治療法の第一選択になっている。この血管内焼灼術には周術期全般に血管エコーを必要とし、手術成績向上にも下肢静脈瘤の病態の理解に加え、血管エコー検査技術の習熟がカギになる。

Endovenous ablation for primary varicose vein using duplex ultrasound

Tomohiro OGAWA

Abstract

The main target of treatment for primary varicose vein is the interruption of saphenous vein reflux. Currently, endovenous ablation is the first choice of saphenous vein interruption as it is less invasive than surgical ligation and stripping, although surgical procedures were popular previously. Duplex ultrasound examination is essential for the procedure of endovenous ablation from pre to post operation. Learning how to perform a duplex ultrasound examination is the key to successfully performing endovenous ablation in addition to understanding the pathophysiology of varicose veins.

Keywords

endovenous ablation, duplex ultrasound, primary varicose vein

1. はじめに

一次性下肢静脈瘤に対する治療として従来は主原因である伏在静脈逆流に対して外科的治療である高位静脈結紮、静脈剥去術が主流であった。欧米では2000年頃から静脈剥去する代わりに逆流静脈を低侵襲的にレーザーや高周波装置から発生する熱にて閉塞させることで静脈逆流を遮断する治療が行われるようになり、2011年の下肢静脈瘤に関するアメリカのガイドラインでは本治療法が外科的治療法より推奨されるまでになった¹⁾。本邦でも、2011年より本治療法が保険適応になって以来、高周波装置も加わり、急速に普及し、現在では最も主流な治療法になっている²⁾。

本治療を行う際には血管エコーが術前評価、麻酔、術中のレーザー、高周波カテーテル操作のガイド、術後評価までなくてはならないものとなっている。

本稿では下肢静脈瘤に対する血管内焼灼術における血管エコーを中心に解説する。

2. 下肢静脈瘤に対する血管内焼灼術の適応決定と血管エコー検査について

下肢静脈瘤治療の一般適応は下肢静脈瘤の存在だけでなく、静脈うっ滞症状である下肢のだるさ、浮腫、足の吊りなどの自覚症状や色素沈着、脂肪織皮膚硬化や静脈性潰瘍などの皮膚症状を有する症例に限るべきである。そのうち、伏在静脈に逆流を有する一次性下肢静脈瘤症例が、血管内焼灼術の適応となる。この際、血管エコーにて表在静脈である大、小伏在静脈の逆流有無、その径と本幹蛇行の程度とその部位、深部静脈逆流、血栓などによる閉塞の有無、および不全穿通枝（表在—深部静脈の交通枝逆流）を確認する。

除外基準は下肢静脈瘤に対する血管内治療ガイドラインに準じるが³⁾、本治療の臨床成績が明らかになるにつれて、その見直しが行われつつある。現在の除外基準の中心は静脈血栓症やその素因を認める場合である。

福島第一病院心臓血管外科

Department of Cardiovascular Surgery, Fukushima Daiichi Hospital, 16-2 Kitasawamata Naride, Fukushima 960-8251, Japan

Received on November 15, 2016; Accepted on November 24, 2016 J-STAGE. Advanced published. date: March 21, 2017